

地すべり学会東北支部 第10回地すべり現地検討会『青葉山地すべり』報告

千葉 則行

地すべり学会東北支部主催の地すべり現地検討会が、昨年10月16・17日の両日にわたり、宮城県仙台市内の青葉山地すべりを対象として行われた。この検討会は毎年開かれる恒例行事の一つで、今回も大学・コンサルタント・官公庁関係から総勢110名に及ぶ多数の参加者を得て開催された。当日はジンクス通り（過去9回、いずれも晴天）、秋空の好天に恵まれた絶好の現地検討会日和であった。

初日の午後、予定通り、集合場所の作並温泉から大型バス、マイクロバスで一路、現地に向けて出発した。現地到着後、さっそく支部長の盛合先生（東北工業大学教授）の開会の挨拶があり、引き続いて現場担当の方の現地説明を受けた。

青葉地すべりは仙台市中心部より西方約



現地説明を受ける参加者

4 kmに位置し、青葉山丘陵の狭窄部を流れる広瀬川の右岸側に発生した地すべりである。この周辺には、対岸の放山地すべり（昭和63年度全国大会時の現地見学会場）をはじめ、八幡、山上清水、三居沢の地すべり指定地があり、宮城県内の地すべり密集地帯の一つとして知られているところでもある。いずれの地すべりも狭窄部を蛇行する広瀬川の攻撃斜面部に位置しており、河川の侵食作用に大きく影響されていることが窺えた。

青葉山地すべりは昭和56年に建設省の指定（面積約23ha）を受け、調査、それにもとづく地すべり防止工の施工が開始された。しかし、翌年以降幾度かの集中豪雨に見舞われた際に顕著な変状が現れ、その都度護岸工、地下水排除工、抑止工などの対策が図られて今日に至っているとの事であった。

現地の見学は地すべり地内をほぼ一周するコースで行なわれ、不動岩盤の露頭、集水井、滑落崖、亀裂・陥没の発生状況などを見て回った。地形の変状は意外に著しく、起伏の激しいところではロープをつたって斜面を下りる場面もあった。また地すべり末端部の広場にはボーリングコアが展示さ

れたが、地すべりに関与する主な地層は新第三紀中新世の梨野層（凝灰岩）及びその上位の三滝層（玄武岩・安山岩類）であり、地すべり発生の地質的素因としては後者の堆積に伴う熱変質による弱部の形成とキャップロック構造であることなどの説明をうけた。



ポーリングコアの展示

徒歩約2時間の現地見学も無事終了し、宿泊・懇親会会場の作並温泉に向った。宿泊所ではさっそく湯に浸って現地見学の疲れを癒した後、恒例の懇親会が開かれ、夜遅くまで盛り上がった。

翌朝、宿泊所の大広間を会場にして、支部長の司会進行で討論会に入った。今回の討論会は例年のスタイルとは違って、まずグループに別れて一時間程討議してもらい、そこで出た質問、意見などをグループの中で最も若い方に代表で述べてもらうという新しい方式で行なわれた。結果は上々で、出席者全員が討議に対する参加意識をもてたものと思われる。各グループからは移動ブロックの区分・移動方向・変動状況、地

下水の供給源・流動方向・観測方法、防止工全般、すべり面の位置・調査方法等について多くの質問あるいは新たな提言がなされ、参加者の関心の高さを改めて認識させられた。最後に討論会の総括として、長年地すべりに携わってきた経験豊富な方々から感想を述べて頂いた。

討論会の締めとして、支部長の挨拶があり、次回の開催地である岩手県で再会することを誓って正午前に終了した。

（東北工業大学土木工学科）



グループ討議の会場風景